

アトピー咳嗽は慢性咳嗽の診断治療に重要な疾患概念か？； PROの立場から

富山市民病院呼吸器内科 石浦嘉久
金沢大学附属病院呼吸器内科 藤村政樹

アトピー咳嗽とは、患者に何かしらのアトピー素因（過去，現在，未来にアレルギー疾患に罹った，罹っている，罹る可能性がある体質）ないし誘発喀痰中に好酸球が観察され，気管支拡張薬が全く無効な咳嗽を呈し，ヒスタミンH1拮抗薬とステロイド薬が有効な新しい疾患概念（eosinophilic tracheobronchitis with cough hypersensitivity associated with atopic constitutionの略）である。日本呼吸器学会や当研究会からの咳嗽に関するガイドラインに明確に定義され，ACCPのガイドラインにも記載されるなど，その存在は広く認知されている。欧米における非喘息性好酸球性気管支炎との異同が問題にはなるものの，乾性の慢性咳嗽においてアレルギーが関与する咳嗽を鑑別しない日常診療は本邦のみならず欧米においてもあり得ないことは既知の事実である。非喘息性好酸球性気管支炎を最初に報告したGibson自身が”Atopic cough”と題して，”It is less useful to consider eosinophilic bronchitis as a disease or a diagnosis of exclusion. Rather, it is a pattern of airway inflammation that is present in a number of common diseases and, when symptomatic, indicates a good response to an accessible treatment (inhaled corticosteroids)”. と報告（Gibson PG. Atopic cough. Thorax 2004; 59: 449.）していることを考慮すると，より厳密な概念を示すアトピー咳嗽こそが重要な疾患概念として認知されるべきであろう。